

# JANES

## ニュースレター

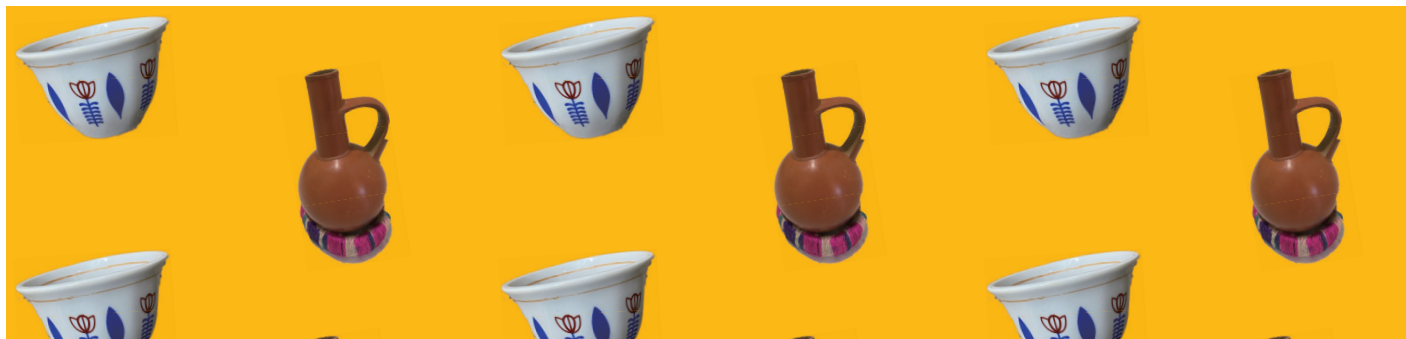
No. 32-2  
Mar. 2025

日本ナイル・エチオピア学会

- 第30回日本ナイル・エチオピア学会高島賞受賞者エッセイ
- 第30回日本ナイル・エチオピア学会高島賞講評
- プロジェクト活動紹介
- フィールド通信(海外研究者訪問)



# 第30回日本ナイル・エチオピア学会高島賞 受賞者エッセイ



## Chiharu Kamimura

上村知春(立命館大学・特別研究員)

この度は、第30回日本ナイル・エチオピア学会高島賞を頂戴し、誠に光栄です。これまでご指導やご助言を賜った先生方、選考委員の皆様、ともに研究に取り組んでくださった皆様、応援をくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

今回受賞の対象となった『恵みありて、インジェラに集う—エチオピア正教徒の食をめぐる生活誌』は、エチオピア北西部の農村に暮らすキリスト教徒（エチオピア正教会の信徒）の食生活を包括的に明らかにすることを通じて、この人びとの食と信仰の関連を記述することを試みた地域研究の研究書です。本書の内容はおもに、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の博士後期課程で取り組んだ民族誌的調査にもとづいていますが、それ以前の経験も、本書を執筆する上で大きな支えとなりました。そこでまずは、エチオピアでの初期の調査活動について手短かに述べることにします。

この書籍の舞台であるアムハラ州の農村やそこに住む人びととわたしがかわりはじめたのは、長崎大学の公衆衛生学大学院修士課程に在籍中の2年目、2011年のことです。熱帯医学や国際保健に特化した公衆衛生学を専門としていた修士課程と、分野の幅と選択肢がより広い、地域研究の博士後期課程以降の研究では、アプローチの仕方がずいぶん違います。修士課程でも質的な調査を行いま

したが、どちらかというインタビューの割合が大きく、博士後期課程以降に、参与観察により重きをおくようになりました。テーマについても、最初から食や宗教に焦点をあてていたわけではありません。修士の学生だった頃のわたしの関心は、一言でいうと、エチオピア北部の農村でみられる病気の種類と発生状況、対応策を、行政や援助機関と地域住民の観点から把握してそれぞれの認識の相違から生じる問題点を分析し、国際医療協力のよりよいあり方を探ることでした。郡役所がある町から5キロメートル以内の、物理的なアクセスが比較的よい村を主要な調査地とし、町に部屋を借りて、そこから村、町のヘルスセンター、アムハラ州の州都バハルダールを歩き来しながら調査を進めました。修士課程修了後は数年間働き、2016年度に博士後期課程に編入学して、かつて調査した村の異なる集落で住み込み調査を開始しました。

この期間に、調査の方法に加えて、調査地での過ごし方にも徐々に変化が生じていったように思います。地域の常識や礼儀がなんとなく身についていくなかで、自らの態度や人とのかわり方について自省することがふえました。異なる時期に、異なる観点から同じ地域で調査できたことで、ものの見方やとらえ方の視野を広げることができました。それが現在の研究の基盤になっています。

本書の特徴は、大きく二つあげることができます。一つ目は、エチオピア北西部のキリスト教徒が飲食するものの生産と消費の過程を、日常生活のなかに位置づけて記述しているところです。インジェラをはじめとするエチオピアの食べ物は、日本での認知度はまだそれほどでもありませんが、欧米では一般にも知られるようになってきています。エチオピアでつくられるさまざまな料理の調理法も、インターネット上の情報で知ることができるようになりました。その一方で、インジェラやほかの飲食物が、インジェラを主食とする人びとにとって、互いにどのような関係をもちながら、生活のなかでどのような役割を担っているのかは、ほとんど明らかにされていません。本書における食生活の詳細な記述はこのことを念頭においています。そして、その問題意識を明確にする上で導入したのが、フードウェイズ の概念です。フードウェイズ という用語は、人類学とその関連分野では、「特定の集団に共有される、食物の獲得、分配、保存、準備、消費、栄養にかんするあらゆる活動と考え方や信念、慣習の包括的な相互関係」と理解されています。フードウェイズ に着目した研究は、欧米では1930年代から進展してきたのに対して、日本の人文社会科学で食の総合的な理解が重視されるようになったのは、最近のことです。そこで本書では、日本における食研究の現状と課題を踏まえて、フードウェイズ 研究を地域研究の立場から発展させることを主要な目標としました。そして、そのことを通じてわたしが本書で記述しようと試みたのが「食と宗教」の関連です。これは、本書の二つ目の特徴とかがかります。

食と宗教に関する研究には豊富な蓄積があり、人文社会科学ではとくに、宗教上の食規制や儀礼時の食に注目して人間や社会のあり方が検討されてきました。エチオピア正教会の文脈では、「断食」と和訳されるts'omや、儀礼的な祝宴とそこでの食事が分析の対象とされてきました。それらの多くは宗教実践を切り口に食を検討しているのですが、本書の特徴は、日々の食実践を切り口に宗教生活を検討しているところにあります。

信徒の食実践には、生産—調理—提供—消費といった一連の活動が含まれます。それらの個々の活動の多くは、外見上「宗教的」ではありませんし、本人たちも「宗教的だ」とは認識していないかもしれません。しかし、食をめぐる宗教生活は、「宗教的」な特徴が目立たない実践とのむすびつきのなかで実

現されています。例をあげると、エチオピア正教会では、教会暦上の特定の祝祭日には重労働をしてはならないとされており、農耕を生業とする信徒の多くはそれに従います。家畜を使用して畑を耕す作業や刈り取り、脱穀は祝祭日に従事してはならない労働に分類されます。ですから人びとは、農作業にかかわる計画を、教会暦上のイベントを考慮しながらたてなければなりません。

また、日常の空間でのささやかな食の実践が、信仰上重要な意味をもつことがあります。エチオピア正教会の信徒は、神・イエス崇拝のほかに聖母マリアや聖人・聖霊を崇敬します。教会コミュニティが一丸となって、聖なる存在にちなむイベントを開催することもあります。信徒たちは私的な理由でも聖人や聖霊に嘆願や感謝の祈りを捧げます。自宅でコーヒーセレモニーを催すことは後者の方法の一つであり、女性信徒の間で広く実践されています。小規模なコーヒーの集いは、クリスマス(genna)などのごちそうを伴う祭日と比べると、目立ちません。しかし、崇敬心に根ざしたおこないは、たとえ外見上些細なようでも、信徒の宗教生活を構成する大事な要素です。

本書では、多数の事例をあげて、信徒の日常生活における食をめぐる営みと宗教のかかわりを詳細に描くことを目指しました。その目標はある程度達成することができたと思っています。残されている重要な課題は、個々の事象を特定の学問分野の主題と関連づけて検討し、理論的に更に掘り下げることです。

本書の執筆中は、文中でもちいる単語やことばづかいをできるだけ慎重に検討しました。そして、日本語のむずかしさと、文章を書くことのたのしさにも気づくことができました。文体を確立するには長い時間がかかりますが、しっかりした文章を書くための努力をつづけていきたいと思います。

今回、拙著が、名誉ある高島賞の受賞に値すると評価していただけたことは、たいへんな勇気と励みになりました。ご支援くださってきたすべての皆様に、心から御礼申し上げます。本当に、ありがとうございます。ありがとうございました。

# 第30回日本ナイル・エチオピア学会高島賞 講評

受賞対象 『恵みありて、インジェラに集う—エチオピア正教徒の食をめぐる生活誌』春風社、2023年。

受賞対象の著作『恵みありて、インジェラに集う—エチオピア正教徒の食をめぐる生活誌』は、2020年度に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出された博士論文を改稿の上、2022年度の日本学術振興会の助成を得て出版された書である。序章と終章を含む全16章よりなる本書は、エチオピア北部の農村に暮らすアムハラの人びとの食生活と彼らのエチオピア正教徒としての宗教実践を丹念に記述した民族誌である。

本書は、食文化に関する民族誌として貴重な貢献をしている。エチオピア北部アムハラ州のエチオピア正教徒の食文化に関する膨大な事例と、それに付随する人びとの行動についての丁寧な観察によって、読者は現代アムハラ農村の食生活を詳しく知ることができる。たとえば、人々のインジェラへのこだわり、詳細なコーヒー・セレモニーの手順、地酒や、練り粥（ガンフォ）、発酵パン（ダボ）といったインジェラを使わない料理の紹介など、非常に興味深い。

また、このような日常生活の延長にある食生活にも、年250日に及ぶ断食のように宗教的な意味をもっているものがあり、詳細に紹介している。エチオピア正教徒の日常生活に溶け込んでいる断食は、通常は水曜日と金曜日が断食日となっているが、それに加えて「祝い日」と対となっている一定期間にわたる断食もある。断食とそれに続く祝宴という食のリズムから生まれる宗教実践がおこなわれる一方で、断食期間中に他の「祝い日」がある場合には、たとえ断食日であっても来客には礼儀として午前中からでも食事をふるまうという柔軟性の指摘も興味深い。

長期のフィールドワークの成果として、これまで見落とされてきたさまざまな事象を丁寧に拾っていることが、本書の真骨頂であろう。アムハラという歴史的に重要な位置を占めてきた民族の食生活が宗教実践とともにここまで丹念に描かれた民族誌は、日本語のみならず他言語でもないと思われる。

ただし、本書には課題が残されている。詳細な食生活に関する記述は、それだけで資料的な価値は高い。しかし、分析軸が明示されていないために、学術的な視点からの踏み込みが足りず、説得的な議論が展開されていない。また、時間的な変化や都市部を含めた他地域からの影響などについての分析がもう少し必要であろう。膨大な事例は本書の特色ではあるものの、結果的に事典的な羅列にとどまっている印象へとつながっている。

このような課題はあるものの、貴重な民族誌であるという価値を減じるものではない。今後これらの課題について、受賞者が応えていくとともに、学会や学会誌などで新たな成果を発信していくことを期待している。上村会員の上記の著作について、本年度の高島賞受賞にふさわしいと評価する。

2024年4月2日  
第30回日本ナイル・エチオピア学会高島賞選考委員会

児玉 由佳(委員長)  
藤本 武  
砂野 唯

# プロジェクト活動紹介

## 建築遺産における3Dデジタル・ドキュメンテーションの実践

**Rumi Okazaki**

岡崎瑠美(芝浦工業大学)

近年、エチオピアでは都市開発が急速に進み、建築遺産が十分な調査や記録がされぬまま解体されるケースが増えている。特に首都アディス・アベバでは、大規模な再開発により、19世紀末から20世紀初頭にかけて建てられた貴重な建築遺産や歴史的街区が次々と消失している。この状況を受け、芝浦工業大学建築史研究室は、アディス・アベバ大学EiABCおよびメケレ大学と協力し、建築遺産のドキュメンテーションを推進している。

このプロジェクトの一環として、2023年に芝浦工業大学とアディス・アベバ大学が共同で「デジタル・ヘリテージ・ワークショップ」を東京とアディス・アベバで開催した。ワークショップでは、フォトグラメトリやレーザー計測などのデジタル技術を活用し、迅速かつ正確な記録手法を実践的に学ぶ機会が提供された。従来の手作業による建築調査は膨大な時間を要し、複雑な形状を正確に記録することが難しかったが、デジタル技術を活用した三次元記録により、より多くの情報を効率的に収集できるようになった。また、3Dデータ化により、専門知識がない人でも建築

物の特徴を直感的に理解しやすくなり、建築遺産への関心向上が期待される。

両ワークショップを通じ、学生はデジタル技術を用いた建築遺産の記録手法を習得し、国際的な協力のもとで実践的な経験を積むことができた。今後もワークショップを継続し、建築遺産の記録と保存を推進するとともに、文化交流や人材育成をさらに活性化していくことを目指す。

### Tokyo Digital Heritage Workshop 2023 / 久富颯介(修士2年)

開催期間:2023年7月26日～8月4日

参加者:アディス・アベバ大学EiABC / Fasil Giorghis, Tadesse Girmay, 学生9名, 芝浦工業大学 / 清水郁郎, 岡崎瑠美, 学生21名, 特別ゲスト / Alula Tesfay Asfha, 伊藤洋子, 青島啓太, 清水信宏, 樋口諒, JSTさくらサイエンスプログラムの助成を受け実施

Tokyo Digital Heritage Workshop 2023では、江戸東京たてもの園にて作成した3Dモデルを題材にエチオピアの建築遺産へのデジタルアーカイブの有用性や適応可能性を両国の学生で議論しました。両国の伝統的建築物の建材が類似してい



東京デジタル・ヘリテージ・ワークショップ参加者

ることから、完成度の高いモデルが作成できると推測できたものの、日本で利用した機材をエチオピアでそろえることは難しく、スマートフォンのような身近なツールを用いた撮影方法の最適化を行う必要があるという課題が示されました。また、データの活用方法に関しては、地域の住民に身近にある建築遺産を価値あるものであると認識してもらうことが遺産保護の第一歩であり、専門知識のない人々にもわかりやすく伝えるためのビジュアル化ができる点が有用である一方で、だれでも利用できる媒体が限られていることが課題となりました。

これらのプログラムを経て、両国の学生がデジタル技術を学んだだけでなく、建築遺産の価値について改めて考える良い機会になりました。日本の場合は保存された建築遺産をより有用に活用するためのツールとして、エチオピアでは急速に消えていく建築遺産を効率的に保存していくためのツールとしての有用性を認識できたことは大きな収穫であったと感じています。



芝浦工業大学での演習風景

## Addis Ababa Digital Heritage Workshop 2023 / 杉山慧 (修士2年)

開催期間:2023年11月1~12日

参加者:アディス・アベバ大学EiABC / Fasil Giorghis, Tadesse Girmay, 学生10名, 芝浦工業大学 / 清水郁郎, 岡崎瑠美, 学生10名

アディス・アベバの歴史地区の一つであるアルメニア地区の建築遺産について、本学とアディス・アベバ大学の学生が協力して現地調査を行いました。この調査では建築遺産の実測調査等を行いました。従来の手実測に加えてデジタルツールを用いた実測も行いました。同年夏のワークショップでの学

びを活かし、デジタル技術に対する理解も更に深めることができました。

エチオピアでの活動では同年夏に行われたワークショップで交流を深めた学生が、多くの場面で協力してくれました。また彼らには調査だけでなくエチオピアのジャズ音楽や食事など、様々なエチオピアの文化を教えてくれ、エチオピアという国への理解を深めることができました。ワークショップに参加したエチオピアの学生は現在は働いていて忙しい日々を過ごしているようですが、私がエチオピアに行くときはいつも気にかけてくれており、時間があれば色々なところに連れ出し、そしてときには研究も手伝ってくれます。異国の地で研究調査を行うときは現地の方にはたいへん助けられ、人のネットワークの重要さに気づきます。こうしたワークショップが一度きりではなく継続されることで、両国間のネットワークがさらに広がり、お互いの国への理解はもちろん、両国の研究・学びの場がますます発展していくことを願っています。



アディス・アベバ、アルメニア地区の実測対象建築



エントト・マリヤム教会の見学

# フィールド通信(海外研究者訪問)

## Visit to Dr. Werner Lange in the U.S.A: Understanding the Lives of People in Southwest Ethiopia (1972-1973)

**Sayuri Yoshida (Nagoya University)**

The author has been conducting cultural anthropological research in the Kafa Zone, southwest Ethiopia, since 2004. From September 22 to 29, 2024, the author visited Dr. Werner Jürgen Lange, who conducted research in southwest Ethiopia from October 1972 to August 1973 and now resides in the United States of America.

### Dr. Lange's background

Dr. Lange, born in Germany in 1946, moved with his family to the United States in 1952 at the age of six. He completed his B.A. and M.A. degrees at Ohio State University and earned his Ph.D. from Goethe University in Germany. He studied ethnology, cultural anthropology, and Ethiopian studies under Dr. Eike Haberland, who was then a professor of ethnology at the university and director of the Frobenius Institute. Dr. Lange was part of the Fourth Ethiopian Research Expedition, conducted by the Frobenius Institute between 1972 and 1974, alongside Dr. Haberland, Dr. Ulrich Braukämper, and Dr. Siegfried Seyfarth. During their expedition to Ethiopia, Dr. Lange focused his research on Gonga, particularly in Sheka (Šeka). He also married his wife, Roxanna, in Ethiopia in December 1972 (Picture 1). Dr. Lange submitted his Ph.D. thesis on the Gimira in 1975 and later became a professor of sociology at Kent State University. In 1994, he completed his Doctor of Ministry (D.Min.) at Ashland Theological Seminary and became an ordained minister in 1996, serving as a pastor for 10 years.

### Reasons for my visit

Dr. Lange's well-known contributions in Ethiopian Studies include his doctoral thesis, *Gimira (Remnants of a vanishing culture)* (1975), and *History of the Southern Gonga (Southwestern*



Picture 1. Dr. Lange and his wife Roxanna with their Ethiopian marriage certificate (photo taken by author, 29 September 2024, in Ohio, U.S.A.)

*Ethiopia*) (1982). The former explores the history, social and political structures, and religion of five ethnic groups: Gimira, Na'ŋo, Tšara, Še, and Benš, while the latter focuses on the four groups of Šeka, Boša, Hinnaro, and Kafa. The author has long been interested in Dr. Lange's research methods regarding these nine ethnic groups during his nearly year-long study in 1972–1973. Some of Dr. Lange's documents and photographs from his time in Ethiopia are available on the Frobenius Institute's website in Germany. Although the author reviewed the photographs online, most were difficult to use for research due to unclear

locations, subjects, and contexts. Consequently, the author was eager to meet Dr. Lange to discuss and gain insights into his research.

### **Southwest Ethiopia in the early 1970s**

Dr. Lange and his wife described life in southwest Ethiopia between 1972 and 1973 as reminiscent of a “Biblical era,” where many aspects of life had remained unchanged for over a thousand years. He observed that most people lived in grass-roofed houses, with only a few towns having tin-roofed structures. Iron was extracted from the earth for tools, and people used earthenware for cooking and eating. They grew cotton, spun yarn, and wove cloth for clothing. However, Dr. Lange also noted the prevalence of widespread disease, including lymphatic filariasis (elephantiasis). While discussing the photographs published by the Frobenius Institute, the author shared a 2006 photograph taken in Kafa Zone, showing a poster aimed at eradicating discrimination against the Manjo people. The author asked Dr. Lange to compare the image on the poster with his memories of the past. Dr. Lange remarked, “The reality was much worse. The Manjo family on the poster looked healthy and much better than in the real past” (Picture 2).

What struck the author was the repeated mention in Dr. Lange’s diary of being “hungry” and having “no food.” Dr. Lange and his wife carried flour and spaghetti with them, purchasing chickens and other food at markets to prepare meals. By contrast, the local people typically ate only two small meals a day. Dr. Lange also recorded that all government officials he encountered during his research were Amhara, and they insisted on collecting taxes from the local people. Those unable to pay were often arrested and imprisoned. His diaries and memories revealed the harsh realities of food shortages, poverty, high taxes, malnutrition, and disease in rural southwest Ethiopia during that time.

Dr. Lange conducted his research with two male

assistants and interpreters: one was a student from Sheka, recruited by Addis Ababa University, and the other was a man from She (Še), whom Dr. Lange met by chance during his travels in what is now Bench Sheko Zone. Dr. Lange emphasized that the latter man’s name was likely a pseudonym, as he had been a university student involved in the student movement and had returned to his home to hide out for fear of punishment. The last time Dr. Lange saw him was in Addis Ababa, where the man left abruptly, stating he had to leave because his whereabouts had been discovered.

### **Conclusion**

The years 1972-1973 marked the end of the Haile Selassie imperial period, followed by the military-led revolution in 1974, the murder of Haile Selassie, and the rise of the Derg regime (1974–1991). Under the Derg, the presence of foreigners was severely restricted, making it difficult for foreign researchers to conduct studies. However, with democratization and economic liberalization under the EPRDF regime from 1991 onward, Ethiopia’s society, economy, culture, and religion became more accessible to the world. Today’s Ethiopia, filled with cheap plastic products and ready-made clothing, bears little resemblance to the “Biblical era” described by Dr. Lange and his wife. His research was conducted during a transitional time, as the country was on the brink of revolution.

The 30-year gap between Dr. Lange’s research in the early 1970s and the author’s research beginning in 2004 was unintentional, but it led the author to visit many of the same places in Kafa Zone. Remarkably, the sons of Dr. Lange’s informants became informants for the author. Conversations with Dr. Lange provided valuable insights into Ethiopia’s modern history, especially the transition from the Haile Selassie imperial era to the socialist regime. The experience also highlighted the importance of organizing and archiving field notes, diaries, and photographs,







JANESニュースレター No. 32-2

2025年3月18日配信

編集・配信：日本ナイルエチオピア学会

編集委員：松波康男、相原進、清水信宏

表紙写真：ADWA VICTORY MEMORIAL MUSEUM  
(ピアッサ・アディスアベバ)  
撮影：相原 進 (2025年2月)